

第70回特別企画展

批評家

子規

文学革新の追求

令和6年12月21日(土)～令和7年2月3日(月)

休館日…火曜日(令和6年12月31日を除く)

開館時間…午前9時～午後5時(展示室入場は午後4時30分まで)

会場…松山市立子規記念博物館 3階特別展示室

観覧料…個人400円 団体320円 65歳以上200円 高校生以下無料

《記念講演》

演題：「啼いて気を吐くホトトギス－子規の批評とその時代－」

講師：田部知季氏(富山大学学術研究部人文科学系准教授)

日時：令和7年1月26日(日)

午前10時30分～正午

会場：1階視聴覚室 ※入場無料

《学芸員による関連講座》

演題：「『歌よみに与ふる書』をめぐる攻防
－批評家・子規の闘い－」

日時：令和7年2月1日(土)

午後2時～3時30分

会場：1階視聴覚室 ※入場無料

《ギャラリートーク》

日時：令和6年12月21日(土)、

令和7年1月18日(土)

※ともに午後2時から50分程度

会場：3階特別展示室

※聴講には観覧券が必要

松山市立子規記念博物館

TEL 089-931-5566

〒790-0857 松山市道後公園 1-30

<https://shiki-museum.com>

批評家 子規

文学革新の
追求



明治文学の革新者として歴史に名を刻む子規。子規は、俳句や短歌を作る「実作者」である一方、文学や芸術を鋭く捉える、批判精神あふ盛な「批評家」としての横顔を持っていました。

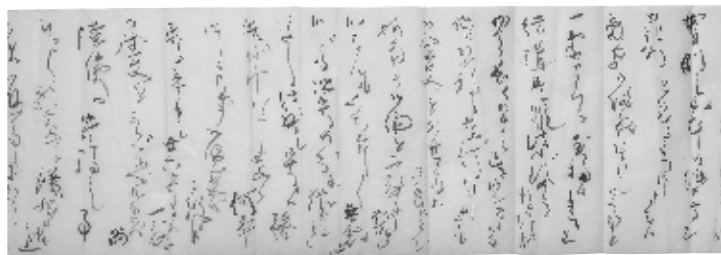
子規の批判精神の原点は、松山の少年時代にありました。自由民権運動に影響され政治家を志した子規は、地元紙『海南新聞』など、新時代のメディアであった新聞・雑誌に強い関心を抱きます。また松山中学校の弁論部「談心会」で政治演説に熱中し、「桜亭雑誌」「明新社会稿」などの回覧雑誌で漢詩文の批評に取り組みました。

子規が松山で培った批判精神は、1883（明治16）年の上京後、仲間との切磋琢磨の中で鍛え上げられていきます。東京大学予備門や帝国大学文科大学で勉学に励み、無二の親友・夏目漱石とは相互に文学論を交わしました。また子規は大学の勉強と並行して、文学の研究に力を発揮します。1889（明治22）年頃から古俳句を収集・整理する「俳句分類」の作業に打ち込んだほか、「俳諧系統」「日本人物過去帳」など、子規が作成した研究資料は膨大な量に及びます。これらは子規の批評活動の重要な資料となりました。

研究を通じて見識を深めた子規は、1892（明治25）年、新聞『日本』に俳論「癡祭書屋俳話」を連載し、これが本格的な批評家デビューとなります。以後、『日本』を中心に「芭蕉雑談」「俳諧大要」「俳人蕪村」などの俳論を次々と発表し、俳句革新を推し進めました。一方で『早稲田文学』発表の「文学雑誌」など、文学・芸術全般にわたる評論も発表し、幅広い批評活動を展開します。

1898（明治31）年には、『日本』で歌壇の腐敗を痛烈に批判した「歌よみに与ふる書」を連載して短歌革新に着手し、新しい短歌像を世に発信しました。こうした子規の批判精神は最晩年の病床でも健在で、随筆「墨汁一滴」や「病牀六尺」の中で鋭く発揮されています。

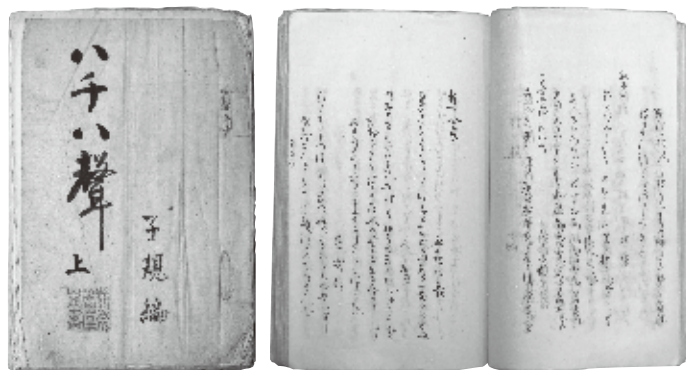
今回の特別企画展では、「批評家・子規」にスポットを当て、俳句革新や短歌革新、文章革新、また文学全般や芸術など、幅広い批評活動の資料を一堂に展示し、文学革新に生きる子規の姿を「批判精神」の視点から紹介します。



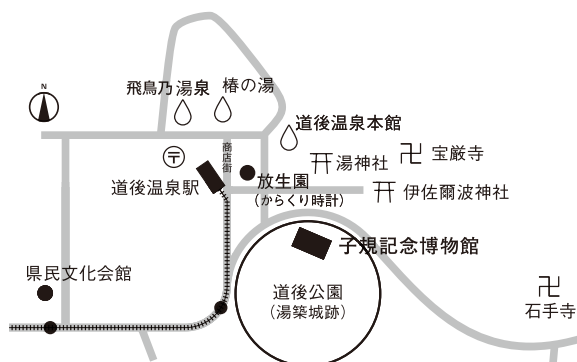
坪内逍遙の子規あて書簡（明治25年10月10日）



短歌革新に取り組んだ頃の子規（明治31年）



子規編「八千八声」（明治22年頃）【新収蔵資料】



道後温泉駅より徒歩約5分／道後公園駅より徒歩約5分 ※公共の交通機関をなるべくご利用ください

松山市立子規記念博物館

〒790-0857 松山市道後公園 1-30

TEL 089-931-5566 <https://shiki-museum.com>



子規評論「俳諧新旧派の異同」
（明治34年4月5日）
〔県立神奈川近代文学館所蔵〕